

## 大賞

### 『尾崎放哉句集』

尾崎放哉著；池内紀編、岩波書店、2007.

堀内 佑紀（文学部 日本語日本文学科 4年）

尾崎放哉。俳句でありながら五七五のリズムを廃し、季語も含めない、自由律俳句というジャンルで活躍した俳人です。私は中学のとき、国語の授業で彼の作品を知って好きになり、それからずっと読み続けています。

彼の代表作に「咳をしても一人」という句があります。ただの独り言みたいですが、自由律俳句なのでこれでも俳句です。咳をしても一人。しみじみしませんか。たとえば私が「いや、こないだ風邪引いて寝込んでさ。俺下宿暮らしたから一人げほげほ咳してても誰も心配してくれなくて、すごく心細かった」と冗長に説明しても、「知るかよ」と吐き捨てられるのが関の山です。でも「咳をしても一人」と言われると、「なるほどな、……」と、ジーンと来るわけです。

その「ジーン」の成分には、自分がそれまで生きてきて味わったことがあり、かつ消化し切れていない（あるいは消化しようのない）孤独のニュアンスを、代弁してもらえた快さが多分に含まれているのではないのでしょうか。放哉の句に対して「わかるなあ、その感じ」と思うのは、裏を返せば「わかってくれるのか、この感じを」でもあるのです。

尾崎放哉は、日常的に感じるような、ごく些細けれども看過し難い微妙な感情を、自由律俳句で掬い上げるのが非常に巧みです。彼の作品を読んでいると、心の老廃物がするする流れ落ちます。

ちょっと話の趣旨がズレますが、自由律俳句なんてなんでも書きゃあそれらしくなるんだろう、と考えたあなたは私と同じくらい浅はかです。制限がほとんどない形だからこそ、ものすごく気をつけて言葉を選ばないと、まったく説得力が出ません。私も調子に乗っていくつか書いてみたら子ザルのへそゴマみたいな駄作しかできませんでした（もしかしたら私に才能がないだけかもしれないかもしれませんが）。文法の崩し方、語義のブレさせ方、説明の端折り方など、放哉ほど見事にやっつてのけるのは至難の業です。この『尾崎放哉句集』を読めば、「日本語でこんなことができるのか！」という発見と感動の連続です。

最後に、私の好きな句を紹介します。放哉は「咳をしても一人」があまりにも有名ですが、このような暗い句以外にも、ユーモラスな句もたくさん詠みました。以下は、私が読んで思わずクスッと笑ってしまった句です。

芋喰って生きて居るわれハ芋の化物

どうでしょうか？ 芋ばかり食べて生活していたんでしょう。でも自分を「芋の化物」呼ばわりまでしなくても。

ピンと来たら（来なくても）、ぜひ心癒されつつ、言語表現の奥深さを堪能してみてください。